社会哲学（M.ヴェーバー1864–1920）・社会人類学（フレイザー1854–1941，マリノフスキー1884–1942）・社会（的存在の）存在論（ルカーチ1885–1971）

— 社会学の起源をめぐって —

東京情報大学
石塚省二

（はじめに）2014年7月に開催される横浜での世界社会学会議では、報告者は「社会学史研究委員会」の特別セッション部会として『社会学の起源』をMarcel Fournier, Michel Wieviorka, Eliezer Ben-Rafael, Roberto Cipriani, Piotr Sztompka, Federico D'Agostino, Jeffrey Alexander（順不同）の7人とともにテーマ化を試みる。それに接続すべくなされるのが本報告の趣旨である。

（目的・方法）「科学的探究を実際に導いている理念と理想を明らかにすること、従って、〈究極のところで意欲されたもの〉を明らかにすることを、ヴェーバーは社会哲学と呼んでいる（『科学論文集』S.150–151）」（カール・レーヴィット1932）（石塚省二『社会哲学の原像』125頁）のでもわかるように、新カント派の価値哲学に基線をおいていたヴェーバーはやがて『プロテスタンティズムと資本主義の〈精神〉』を論じる。それに対して10年先輩のフレイザーは、それだけ先輩のニーチェをも、やがて離れるルカーチとも親和的なヘーゲルの宗教哲学と交錯する宗教や儀礼のテーマ化に既に入っていたのである。百周年を迎えている『金枝篇』の試みである。まもなく650年祭を迎えんとするヤギェウォ大学の先輩に報告者にとっては当たるマリノフスキーは、その地クラクフで同書を読み、ロンドンの地で社会人類学を創始するのである。進化主義や歴史主義一辺倒からの機能主義への転換がいかになされたのか？ここではこれがテーマとなる。運命のいたずらとは言え、ヴェーバーの弟子となったジンメルの影響も強いゲオルク・ルカーチは、その哲学的総決算の書『社会的存在の存在論』を1964年から1971年にかけ書き残している。マリノフスキーの『文化の科学的理論』（1944年刊）と同書の比較対照がテーマとなる。

（結果・結論）『マックス・ヴェーバーとカール・マルクス』論文（1932年ヴェーバー創設にかかわるかの『社会科学と社会政策雑誌』67巻1–2号 53–99, 175–214（通しページ）に発表されたKarl Löwith 1897–1973の労作）が見事に明らかにしているように、ヴェーバーの探究の動機はまさに「神なき時代」「世俗化の進行」、つまりは「宗教」のテーマ化と「合理化」のテーマ化、資本主義・宗教・科学と技術のトリアーデが社会学の誕生の根底をなすものであった。それが、自然と文化、文明と野蛮というテーマ化、二項対立図式の中で姿を現わし、性愛やタブーのテーマ化という形で社会人類学の研究が本格化したのである。マリノフスキーは1944年刊の中で「起源（origin）」についてこのように述べている：「したがって、起源という概念は、我々にとっては文化的行為に対して前文化的行為を区別するのに必要かつ十分な最低条件を意味するにすぎないのである」。自然的諸欲求を起源にして文化的諸欲求が位置付けられる。この事情は、ルカーチが「労働」―「再生産」―「観念的なものとイデオロギー」―「疎外」の4つのカテゴリーで展開される社会的存在の存在論でも同様である。この意味で「社会学の起源」は、これまで言われてきた人間精神の自然に対する意識に基づきながらもそれとは区別される自己意識に求められると言えよう。2011.3.11.フクシマ以降の文明の転換について考察することができよう。

（文献）ヴェーバー『科学論文集』，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の〈精神〉』
フレイザー『金枝篇』 マリノフスキー『文化の科学的理論』
ルカーチ『社会的存在の存在論』 石塚省二『社会哲学の原像』
『近代の終焉と社会哲学』『ルカーチ入門』『ポストモダン状況論』等。

2013.平25.6.1（土）柏にて記す。